

最終講義

ジャーナリズムの「窓」から見た世界

大 空 博

はじめに

明けましておめでとうございます。きのうから2003年の授業が始まり、後期セメスターの総仕上げと、期末試験へ「これからひと踏ん張り」と決意を新たにしている皆さんに、最終講義というのでは、ちょっと申しわけない気がします。

本来、最終講義は担当教員の授業、私の場合なら「国際ジャーナリズム論」の最終回にふり当てられるべきものです。しかし「国際ジャーナリズム論」は昨年の夏休み前にすでに終わっていて、後期の「国際情報論」は、今期だけの例外で秋の新学期直前に集中講義としてとり行われていたことから、きょう1月7日の四時限目に別途設定された次第です。そのようなわけで、通常ならありえないこの授業に多数のみなさんが出席されていることに、私は驚き、感激しています。このような機会を設けていただいた奥田学部長と最終講義の行き届いた準備を下さった学部事務室の方々に、改めてお礼を申し述べます。

皆さんもご存知のように、私は34年間を新聞記者として過ごしてきました。その後、教員として5年間、立命館大学国際関係学部に着をおき、最初は金閣が樹木の間に垣間見える山道に面した西園寺記念館で、そして後半は衣笠キャンパスに新装なった恒心館で、楽しく、充実した学園生活を送ることができました。

いま、こうしてここに立っていると、3年前の今を思い出します。私の大学の先輩であり、国際関係学部でもお世話になった西川長夫先生の最終講義の時間です。そのときのテーマは「フランスの解体？もうひとつの国民国家論」というものでしたが、講義に先立ち先生は定年退職という制度について興味深い話をされています。ここでその一部を紹介します。

定年を“解放”と考えるか“追放”と考えるのか、人により国によって違うように思います。フランス人の多くにとっては、定年は紛れもない解放です。アメリカのように性差別とともに年齢差別に対する批判が厳しいところでは、定年という制度自体、崩れかけていると聞いています。私自身は「最終講義」を人類学でいう「通過儀礼」の一種として受け入れることにしました。誕生や成年式や結婚などと違って、「最終講義」は死への通過儀礼、つまり生きている

間に行なわれる葬式のようなものだと思います。

通過儀礼を、一種の「葬式のようなもの」と表現されたのには、度肝を抜かれました。西川先生の場合、「戦時の体験」と「重い病気」の記憶がその言葉の背景にあったからで、「自分の今は余生であるという感覚」がそこから生まれています。そして「これからは社会的に公認された、第二の本当の余生が始まる」という希望を語られたのでした。それは「今までより少しは自由人として」「真の人生」を送りたいという決意表明でもあったと思います。

西川先生とは別に、私の身近なところで「余生」を口にする人物がいました。サイゴン特派員としての前任者であり先輩でもあった人物が、その一人です。ベトナム戦争末期の取材に全身全霊を傾けた彼は、「これからの記者生活は余生」だといいいながら、それでいてその後、パリ、ワシントン特派員として、さらにその後もいくつもの重要なポストをこなし華々しい活躍をしました。もうひとり、1975年4月のサイゴン陥落のとき現地で応援取材した同期生も、本来の赴任地バンコクで悪性の肝炎にかかり九死に一生を得た後は、これからは「余生」だと言い、肝臓にいつ爆発するかもしれない病巣をかかえながら、ワシントン特派員を二度つとめ、外報部長（現在の国際部）、編集局総務、調査研究本部長という激職をこなし、60歳で壮烈に死んで行きました。最初に述べた先輩も、58歳で世界しています。

65歳になった今も生き延び、最終講義という通過儀礼をへて迎える私の「余生」は、西川先生がおっしゃったような「自由人」として「真の人生」に立ち向かうものでありたい。いま私はこのように考えています。それが、若くして死んでいった先輩と同期生の霊に、まともに向かい合うことになると思うのです。

1. 世界が大きく変わったとき

私は1985年11月の、ひとつの出来事を語ることから、本日の最終講義を始めたいと思います。いまから18年前にあたる85年の11月といえば、ここに出席している学生諸君が、まだ生まれていなかったか、生まれていたとしても、二歳か三歳のころです。

ひとつの出来事というのは、その年の11月に初めてジュネーブで実現したレーガン・ゴルバチョフ米ソ首脳会談です。米ソ首脳が顔を合わせるのは、79年6月の、ウイーンでのカーター・ブレジネフ会談くらい実に6年半ぶりでした。そこでSALT（第2次戦略兵器制限条約）の調印が行なわれ、冷戦時代の米ソ両超大国による世界管理システムに緊張緩和の要因がひとつ導入されたものとして大きな期待が寄せられました。しかし、その年の11月4日、テヘランでイラン学生によるアメリカ大使館占拠事件が発生、さらに12月24日にはソ連軍がアフガニスタンへ侵攻し、米ソ関係はまたたく間に戦後最低のレベルにまで冷え切って行きました。この

事件が翌80年7月の第22回オリンピック・モスクワ大会を、アメリカを筆頭として日本、西ドイツ（当時）などにボイコットさせるきっかけとなったことを思い出します。

85年のジュネーブにおける米ソ首脳会談は、このようにして冷え切った両国関係を打開するための歴史的な会談となりました。2001年アメリカで起きた「同時多発テロ」事件の9月11日を「世界が変わった日」として表現したイギリスの週刊誌があります。それと同様に、このジュネーブ会談を「世界が大きく変わった日」として、歴史の中に位置づけていいでしょう。しかし、それが4年後の、89年11月9日・ベルリンの壁崩壊、91年12月25日のゴルバチョフ大統領辞任とそれに伴うソビエト連邦の消滅につながることは、当時、だれも予測できませんでした。この事実は、しっかりと記憶にとどめておく必要があると思います。

雲が低くたれこめ、小雪が舞い降りてくるジュネーブの灰色の空を、いまでも鮮明に覚えています。私はその年の10月、支局長（後に欧州総局長）としてロンドンに赴任したばかりでした。それから1か月もたたないうちに“ぶち当たった”のが、レーガン・ゴルバチョフ米ソ首脳会談だったのです。ジュネーブには私のほかにワシントンから大畠俊夫アメリカ総局長、石川弘修（現・読売理工学大学院理事長）、斉藤彰（現・読売新聞東京本社編集局総務）両特派員、小島敦モスクワ支局長（現・読売新聞東京本社調査研究本部長）がジュネーブに集結しました。それに現地の中道正樹特派員がいました。このときの大畠俊夫アメリカ総局長こそ、ついまいしがた「余命」のくだりで紹介したサイゴン特派員としての、私の前任者であり先輩です。

このように多数の特派員が一つの“事件”に集中し、多角的な視点で報道するケースは決してまれではありません。たとえば1975年11月に私自身が経験したパリ郊外ランブイエでの第一回先進国首脳会議（サミット）には、東京から政治部と経済部のデスクを含めて4人、ボン、ロンドン、ワシントンからそれぞれ1人ずつ特派員がはせ参じ、パリの（このときもまた）大畠支局長、それに私をいれ総勢9人が取材・報道に当たっています。

1973年1月28日、ベトナム和平パリ協定が発効し停戦を迎えたときの読売サイゴン支局にも9人の特派員がひしめき合い、それぞれ仕事を振り分け取材先に散っていったものでした。

多数の記者が集まり記事を書く場合、たとえば新聞紙面でどんなことが起きるか、皆さん注意して紙面を見て、考え、分析したことがありますか。新聞の縮刷版を取り出して古い記事を読み返してみると、その辺の事情がよくわかります。ジュネーブ会談が始まった11月19日の翌日の読売新聞・朝刊を見ると、1面トップに「米ソ首脳会談始まる」「冒頭から2人で実質討議」「予定外の再会談 計2時間 “良い兆候”」「SDI（米戦略防衛構想）では対立か」という見出しがついていて、新聞の世界で言う「総合リード」、つまり会談全体の動きを要約しまとめた文章が次のように続いています。

【ジュネーブ19日＝読売特派員団】レーガン米大統領とゴルバチョフ・ソ連共産党書記長の

第一回首脳会談は、世界が注視する中、19日午前10時（日本時間同日午後6時）過ぎから、ジュネーブ郊外の別荘「フルール・ドー（水の花）」で始まった。米ソ両首脳の顔合わせは、去る79年のカーター・ブレジネフ会談以来6年半ぶり。レーガン、ゴルバチョフ両首脳はこの日、冒頭のサシの会談で、予定の15分を大幅に上回る1時間4分にわたって協議、さらに午後の全体会議後戸外で再度50分、予想外の異例の個別会談を続けた。両首脳の水入らず会談のほか、午前と午後の2回、双方6人の代表団を交えた全体会議が行なわれた。消息筋によれば、第1日の話し合いで、来年、アメリカで次回首脳会談を開く問題や、ジュネーブ米ソ包括軍縮交渉を具体的に前進させる方策についても意見交換が行なわれた模様である。ゴルバチョフ書記長は、個別会談が予定より大幅に延びたことについて「良い兆候だと思う」と答えた。また、ソ連側スポークスマンも、初顔合わせが「良い雰囲気の中」で行なわれ、「米ソ関係」を中心に一連の政治問題について、「実質的な討議」があったことを明らかにした。（関連記事2・3・5面に）

この種の重要会談では、総合リードの末尾に記されているように、大量の関連記事が他のページにも振り分けられて掲載されます。首脳会談取材に世界中から集まった報道陣は3400人を越えました。日本の新聞社では朝日、毎日、産経、日経といった全国紙のほかに北海道・中日・西日本のブロック紙などが読売とほぼ同じ規模の記者団を送り込んでいて、NHK、民放TVをも交えて壮烈な取材合戦を展開しました。といっても記者団が首脳会談の部屋に取材のためにどかどかと踏み込むことは、当然のことながら許されず、私たちは特設のプレスセンターで待機、米ソ両国スポークスマンの経過報告があるという情報が入ると、一斉に記者室を飛び出して行く有様でした。

会議場前に陣取り、また他の場所で取材、目撃した話題は「ジュネーブ便り」というコラム欄に書きました。たとえばレーガン大統領、ゴルバチョフ書記長以下米ソ代表6人が向かい合って座る大テーブルは、その日のためにニューヨークの米国連代表部からわざわざ空輸したこと、空輸の途中脚が一本折れ、会談の先遣隊をハラハラさせたひと幕があったこと、レーガン大統領を歓迎するためフルグラール・スイス大統領官邸で催された18日午後の式典で、氷点下5度近くの寒風のもとに立ちつくす儀仗兵の一人が、突然、気を失ってばったり倒れた、という話題が20日付の読売・朝刊「ジュネーブ便り」に掲載されています。

同じ朝刊の5面を広げると、そこには「首脳会談 米ソそろって盛り上げ報道」「速報、解説、特ダネ合戦」「ブラウダは新提案示唆」といった大見出しで、これは「ジュネーブ発」ではなくワシントン、モスクワに残った記者が打電しており、ニューヨーク特派員も「米大統領ゴ書記長の訪米要請へ」という情報を流しています。その根拠として特派員は、19日付ニューヨーク・タイムズ紙の記事を引用し、ジュネーブ滞在中のホワイトハウス高官の話として「レ

ーガン米大統領は、一連の米ソ首脳会談を締めくくるにあたって、ゴルパチョフ・ソ連書記長の訪米を要請する意向である」という情報を転電しています。

会談初日の紙面は、1面、2面、5面を首脳会談の関連ニュースで埋め尽くしました。しかし、首脳会談で実際に何が話し合われたのか、肝心のことは何も書き込まれていないことに、皆さん、すでにお気づきでしょう。実際、現地の取材現場にいた私たちは、ほとんど何も分からないまま、首脳会談の初日を終えたのでした。

2. 歴史の現場に立つジャーナリスト

【ジュネーブ19日＝読売特派員団】のクレジットで書かれた20日付朝刊・1面トップの総合リードは、東京本社デスクとジュネーブ現地の大島デスクの間で取り交わされた“情報”をもとに書かれたものでした。総合リードの文中に見られる「ゴルパチョフ書記長は、個別会談が予定より大幅に延びたことについて『良い兆候だと思う』と答えた」という表現を読む限り、書記長が記者団に向かって直接に語りかけたように受け取れますが、事実はそうではなく、第1回全体会議終了後の19日午後1時から、ジュネーブ国際会議センター内で開かれたザミヤーチン・ソ連党国際情報部長の記者会見での内容を、そのような表現で、厳密に言えば事実に反した形でまとめたものでした。

この記者会見に出席したモスクワの小島記者は、両首脳の会談が「良い雰囲気の中で行なわれ、両首脳は単に知り合っただけでなく、一連の政治問題について実質的な討議を行なった」というザミヤーチン情報部長の話を、直接話法の形でまとめ、別途、独立した記事に仕立てています。

一方、ワシントンから来た石川記者はスピークス米大統領報道官の記者会見を取材し、「一連の首脳会談についての発表は、20日の会談日程終了までは一切行なわないことで、両代表団が合意したと発表した」というニュースを記事にしました。

私たち記者団泣かせの、ブラックアウト（報道管制）です。

石川記者がまとめたスピークス報道官の発言要旨は、次のようなものでした。

- 一、米ソ首脳会談が終了するまで、合意事項を含め会談の内容をいっさい公表しない。米ソ双方はそれぞれの問題について真剣な討議をしやすいように公表を控えることで一致した。会談の時間、参加者名だけについて発表する。
- 一、米ソ双方とも会談の背景説明を行なわない。米側はこの合意を完全に順守するものであり、会談で何が話されているか、だれも公表することはない。会談内容の発表は2日目（20日）の会談終了後か、21日朝になるだろう。
- 一、会談内容の「ブラックアウト」（報道管制）は会談の冒頭で決定された。

こうして歴史的な米ソ首脳会談初日の肝心の情報は、報道管制のもとに覆い隠され、新聞読者に「真の情報」は伝えられませんでした。

しかし私たち報道陣が完全にお手上げであったわけではありません。会談に先立ち、私たちは事前の取材で、会談で何が話し合われるのか、その意義は何かといったことを、手を変え、品を変えて書いていました。読売新聞の場合、たとえば「米ソサミットを占う」という連載を企画、ワシントン、モスクワ、欧州の見方をそれぞれの地域の特派員が識者にインタビューし、また独自の取材で関係者の視点をまとめています。

11月初旬、私はロンドンからパリに飛び、フランス国際関係研究所（IFRI）のティエリ・ドモンブリアル所長の見解を次のようにまとめています。その一部を紹介すると...

第2次大戦後、国際政治システムの大枠は、米ソ両国を軸に構築されてきた。この間、東西とくに米ソ関係は緊張と緊張緩和の間を揺れ動いたが、緊張が激化した時期でさえ、両国が全面的に対立したわけではなかった。また、緊張緩和の時代にも完全な和解が成立したわけではなかった。（中略）

私が最も重視するのは、ゴルバチョフ氏が目ざすソ連国内体制の構造的な変革と、デタント復活が密接に関連している点だ。

このとき米ソ首脳会談の行方を占ううえで、誰をも困惑させた最大の要因は、ゴルバチョフ・ソ連書記長の存在そのものでした。1982年11月にブレジネフ書記長が死去、後任書記長にアンドロポフ氏が選出されましたが、彼は84年2月に急死。後任のチェルネンコ氏もわずか1年1か月の任務を果たしただけで、85年3月10日に病死しているのです。わずか2年半足らずの間に3人の国家元首が去ったあとに、突然、脚光を浴びて登場したのがゴルバチョフ書記長でした。85年3月に新書記長に選出されて8ヵ月後の、ジュネーブでの検舞台です。「ゴルバチョフとは一体何者?」「彼は何をやるようとしているのか」というナゾと疑問が沸き起こるのは当然です。ゴルバチョフ情報は、当時、あまりにも少な過ぎました。

しかし、当時の新聞を注意深く読み返すと、書記長に関する興味深い記述がいくつかあることに気づきます。85年11月13日付読売新聞・朝刊の4面に小島敦モスクワ支局長が書いた「モスクワで考える」というコラムはそのひとつでしょう。小島記者は11月7日の、時折、小雨がぱらつく赤の広場で繰り広げられた革命記念日・軍事パレードの様相から書き出し、そこに列席しているソ連首脳たちの姿を目で追いながら、「クレムリンがすっかり若返った」ことを実感します。1年前、同じ革命記念日の軍事パレードに列席していたチェルネンコ書記長、首相、外相3首脳の前平均年齢が75歳だったのに、いま目の前に列席するゴルバチョフ以下の、新しい

3 首脳は平均年齢は20歳も若返っていました。

「ゴルバチョフ書記長の登場は、老齡、病弱な指導者にうんざりしたソ連国民が待望していた強力な指導者の出現を意味している」 こう小島記者は書き、ライバルであったロマノフ氏の有無を言わせぬ解任と、グロムイコ氏の国家元首への“棚上げ”から、チーホノフ首相、バイバコフ国家計画委員会議長の解任にいたるスピード人事に、ゴルバチョフ氏の辣腕と改革への決意を読み取っています。そして「外交は内政の延長」と主張するゴルバチョフ氏にとってレーガン氏との首脳会談で得点を稼ぎ、威信を高めることが「現在進めている内政の荒療治のために大きな武器となろう」とし、首脳会談で「米ソ関係の安定化」への道を開くことが「最低条件」だと指摘しています。

1985年11月21日朝、ジュネーブの国際会議センターの共同式典に臨んだレーガン米大統領とゴルバチョフ・ソ連共産党書記長は、「米ソ首脳、相互訪問で合意」を高らかに謳い上げました。86年にゴルバチョフ書記長が訪米、翌87年にはレーガン大統領が「悪の帝国」と決めつけていたソ連の首都モスクワを訪問するというのです。首脳会談はこうして幕を閉じ、13項目の合意事項を盛り込んだ共同声明には、「米ソ核軍縮促進で一致」「50%削減を共通基盤に」といった項目が含まれていましたが、最大の成果は小島記者が指摘していた「米ソ関係の安定化」をうながす首脳・閣僚の定期協議へ道を切り開いたことでした。

3. 「9・11」と「対イラク政策」に収斂する世界

新聞は「世界の歴史を刻む時計の針」のようなもの、言い換えれば「世界史を刻む秒針」といわれた時代があります。テレビやインターネットの時代を迎えている今日、その表現がいまも通用するのか、じっくりと検討する必要はあると思いますが、新聞記者として主として海外で取材活動を続けてきた私個人の体験でいえば、刻一刻と事態が変化する歴史の現場で仕事を続けてきたなかであってその思いは、今も変わりません。ジュネーブでの米ソ首脳会談の例でもお分かりのように、時には取材先の報道管制によって、まともな記事が書けない悲哀を舐めさせられることがあります。発表された情報だけにすぎず、実は裏でもっと大事なことが取り交わされていたにも関わらず、それを察知できず真実を書けないままで終わり、後になって歯軋りすることもあります。しかし、取材の現場に立ち、考え、感じ、見たこと、言いたいことを、さらには、ときに言わなければならないことを勇気をもって書き、読者に伝えるという作業を通して歴史の証人となり得るジャーナリストの役割に、これからも変化はないでしょう。

ソ連の激動に先駆けてソ連・東欧世界を震撼させる事件が、1980年ポーランドで起きています。その年の8月、北海に面するグダニスクで発生した造船所労働者のストは、瞬く間にポー

ランド全土に波及し、社会主義体制を突き崩す原動力となりました。そのとき日一日と変わる情勢を細かく、生々しく伝えた一人のジャーナリストがいました。フランス・ルモンド紙のベルナル・ゲッタ記者です。彼はワルシャワから、そしてグダニスクからルモンド紙に連日のように長文のルポルタージュを書き送り、当時、読売の東京本社でデスクのポストにいた私は同僚の川島太郎記者とそのルポを翻訳し、新評論社から緊急出版しました。翻訳を依頼してきたのは現在・藤原書店の社長、藤原良雄氏ですが、日本人記者が書けなかったことを、翻訳を通してでも日本語に訳して読者に伝えたいという強い思いが、私たちに緊急の仕事を引き受けさせた動機でした。時には翻訳という作業も、ジャーナリストにとって欠かせない任務のひとつだと私は考えています。

ベトナム戦争の取材で散っていったカメラマンたちの写真展が昨年5月、立命館大学平和ミュージアムで開催されたことは、皆さんの記憶にまだ新しいでしょう。あのときの写真原画をもとに『レクイエム』と題した写真集（集英社）が97年10月に米・英・日の3カ国で同時出版されました。その写真集に寄せられた欧米記者たちの追悼文や関連記事の翻訳を私が引き受けたのも同じ気持ちからでした。私のベトナム体験を重ね、戦場に散ったカメラマンたち、彼らの写真に追悼文を書いた欧米記者たちの、切なく熱い思いに私自身を同化させ、翻訳作業に打ち込んだあの年の、夏の汗の結晶が日本語版『レクイエム』となって、初めて日本の読者のものとなったのです。

いま私は、こうして最終講義という儀式的場に立っています。この5年間を振り返ると教員として皆さんと向かい合うことの難しさを痛感しました。教員として「教える」という意識を持つと、難しさがますます募っていきました。しかし、あるときから私は「教員となっても、ジャーナリストであり続けたい」思いを自覚するようになり、それ以来、みなさんと自然体で付き合えるようになりました。

立命館大学国際関係学部には、退職する教員のために記念論文集を編集して残すというありがたくも美しい慣習があり、いま編集作業が進められています。3月の卒業式には卒業生全員と在学生に配布される、その記念論文集にジャーナリスト時代の先輩、友人、同僚4人が寄稿してくれています。その中の一人、かつてモスクワ支局長だった小島敦記者が書き寄せてくれた原稿にふれながら、私のきょうの話を終わりにしたいと思います。

小島記者は現在、読売新聞東京本社の調査研究本部長という役職についていますが、いまなおジャーナリストとして日本を代表するロシア問題専門家の一人であります。今回、彼は「プーチンのロシア」と題して、400字の原稿用紙で50枚を越える文章を書いてきました。そのなかに興味深い記述があります。ソ連の秘密警察・国家安全保安委員会（KGB）のエリートとして16年間諜報機関員として働いたプーチンは、その後、モスクワで政権の中枢に入り、エリツ

インの後継者としてロシア大統領になった人物ですが、それ以前に過ごしたサントペテルブルク時代にキッシンジャー元国務長官と対面したことがあります。そのとき元米国務長官が語った言葉を『プーチン、自らを語る』（原題・『オト・ピエルヴォヴァ・リツアー』＝日本では2000年3月翻訳刊行）の中で「ソ連は東欧からあんなに早く撤退すべきでなかった。（その結果）われわれはあまりにも早く世界の（力の）均衡を変えることになり、望ましくない結果を招く可能性が出てきた。正直言って、ゴルバチョフがどうしてあんなことをしたのか、いまでも理解できない」という表現で紹介し、彼は「間違っていなかった」と断言しているというのです。そしてプーチンは「もし、あの時、大あわてで逃げ出さなかったら、あのあと、われわれはきわめて多くの問題が起こるのを回避できただろう」と自ら結論づけているのですが、その記憶と体験が大統領に就任したプーチンに真っ先に「強いロシア政策」を打ち出させることになったと小島記者は書いています。

小島記者は85年のジュネーブ会談のあとモスクワに戻り、ゴルバチョフ書記長が断行したペレストロイカ（立て直し）とグラスノスチ（情報公開）政策を克明に追い続け、ソ連の政治家、歴史学者、文化人、経済学者ら100人を越える要人とのインタビューを繰り返し記事にしました。後に『ソ連知識人 ペレストロイカを語る』（読売新聞社 1990年刊）という本にもしています。だれもが予想できなかったほどのスピードで進んだゴルバチョフの改革が、逆にソビエト連邦の解体とエリツイン時代の混乱を招いた歴史の皮肉。それを目の当たりにしてきた小島記者にしか書けない「プーチンのロシア」です。

「ロシアはオープンでバランスのとれた、明快な外交を推進していく。ロシア外交の中心は、ロシアの利益を実現させることであり、それを厳しく守りぬくことである。ロシア外交の新要素は、国際情勢を評価するにあたっての現実主義と完全な実利主義だ」この言葉はプーチン新政権の外交についてイーゴリ・イワノフ外相が用いた表現ですが、2001年秋、米国で起きた9・11同時多発テロ事件後の対応に示したロシアの対米政策を理解するうえでカギとなるものでしょう。「国益第一主義」外交原則に基づき、プーチン大統領は、事件後、もっとも早い時期にアメリカへの全面支援を表明し、ブッシュ政権のテロ戦争に協力する5項目の決定を公表しました。中央アジアの旧ソ連共和国への米軍駐留を認めたのもプーチンのロシアでした。チェチェン問題というトゲを抱え込んだロシアにとって、対米協調を前面に出すことが自国の国益に合致するという計算がそこに働いています。

冷戦以後の“アメリカ人勝ち”といわれる時代が到来した今でも、米ソの協力関係が世界の動きを左右している事実の一端が、ロシアのブッシュ政権への素早い協力姿勢表明からうかがい知れるように思われます。2001年の9・11事件から今日のアメリカの対イラク政策にすべてが収斂する形で、世界は動いています。この状況はいましばらく続くでしょう。今回の記念論文には小島記者のほかにも学外者の特別寄稿を求め、伊藤光彦氏（和光大学教授、元毎日新

聞記者)による2002年のドイツ総選挙とシュレーダー首相の対イラクへの参戦拒否声明,小倉貞男氏(中部大学教授,元読売新聞記者)によるポルポト国際司法裁判,鈴木雅明氏(読売新聞東京本社解説部次長)による近代トルコ 非民主性 の系譜に関する,それぞれ現場取材に基づく分析を頂いていますが,それらがすべて対米関係に深く結びついて展開されていることに,国際関係の同時性を痛感します。国際関係学を学ぶ受講生に「世界を読み解く手段」としてのジャーナリズムの重要性と有効性を説いてきた私の五年間でした。2003年初頭にこのような形で最終講義をもてた意味を改めてかみしめながら,本日の話を終わらせていただきます。

ジャーナリスト時代の主な取材・報道記事

(日付・いずれも読売新聞掲載日・記事は縮刷版参照)

1)サイゴン特派員時代(1970年5月~73年2月)

a)現地ルポルタージュ

1970年

「インドシナ問題 アジア会議開く -カンボジア代表,討議からはずす」5月17日

「アジア会議 日本初めて国際紛争の舞台に」5月18日

(以上二本の記事はサイゴン赴任直前,ジャカルタで開催されたアジア会議の応援取材)

「カンボジア進行作戦 友軍でない略奪者(南ベトナム政府軍)食料・家財取り放題 長期駐留に逃げ出す住民」6月18日

「北緯17度線沖で実現した北ベトナム捕虜引き渡し」7月13日

「米のカンボジア爆撃 再び介入色強める」8月10日

「ベトナム戦線 奇妙な静けさ 共産側,政治闘争に重点」10月25日

*ソンミ村一連の取材

「虐殺のソンミ村にカーレイ中尉が来る 廃虚の村 生活の影重い生き残り」70年11月31日

「虐殺から3周年のソンミ村」71年3月16日

「虐殺の村」は遠かった」73年1月3日

「よみがえった“虐殺の村”ソンミ」90年10月26日(この記事は編集委員のとき18年ぶりにベトナムを訪れたときに書いた。カメラ・大嶋則之)

「少年射殺で市民の怒り爆発 反米デモ広がる動き」12月11日

「サイゴン 学生デモ最悪事態に 米,韓国兵襲撃」12月13日

1971年

- 「トンキン湾に浮かぶ海上基地 北爆の米空母キティホーク同乗記 連日約百機が出撃 ハノイも射程内」(カメラ・守田宏一) 1月3日
- 「ラオス進行作戦・日本人カメラマンの死」(写真集『レクイエム』参照)
- 「ラオス作戦支援基地ケサン 危険なカケ、チェボン進撃」3月7日
- 「ラオス作戦 南の増援軍壊滅かー1日で死者千数百」3月11日
- 「ラオス作戦の南軍4千人が撤退完了」3月20日
- 「カンボジア 重大危機 - 越境作戦の南軍も暗い表情」11月23日
- 「南ベトナム奇妙な静けさ メコン・デルタ地帯 解放戦線に転機？」12月26日

1972年

- 「ラオス王都、ひしめく難民」1月20日
- 「猛爆下の“新型作戦” 南ベトナム中部高原に見る」3月18日
- 「『北』の春季大攻勢 北部戦線 おびえる古都ユエ」4月6日
- 「春季大攻勢“完全解放区” 叫ぶ共産軍」4月26日
- 「ユエ、混乱の極 敗者は歩いて逃げた」5月3日
- 「ユエダナン、難民の列 炎天下 恐怖の放浪」5月4日
- 「踏みにじられる解放区難民」 中部海岸ピンディン省フーミで」7月3日

1973年

- 「和平協定調印前夜 渦巻く不安 メコン・デルタ地帯」1月27日
- 「おれたちの任務は終わった - 静かに停戦かみしめる米兵士 ビエンホア基地」1月29日
- 「テトの南ベトナム解放区 メコン・デルタのウーミンの森 - 憎しみ忘れ 熱っぽく民族独立論 銃は片時も放さず」2月7日
- 「しぶとく生きる解放区 3日間の体験記 - “敵地”へ買い出し 毎日往来する農民たち」2月13日
- 「二つの帰還“宴”のあとに冷たい現実」(和平協定成立後に帰還した米兵と家族のもとに戻った「南」軍兵士の写真グラフへの寄稿) 2月25日
- 「サイゴン陥落の日、パリの同胞 祖国帰還に不安 - 失意の在住ベトナム人」(この稿はパリ特派員時代) 75年5月2日

b) 一般記事・特集

- 「偽りの繁栄サイゴン 砲声絶えた町、汚職はびこる」71年5月26日
- 「“ペンタゴン・ペーパーズ”の衝撃 困惑・怒りのサイゴン市民 “20年戦争”の意味問い直す」71年6月26日

- 「『南』大統領選 “ 混迷ドラマの裏側 ” - 直情，機を見るに敏 キ副大統領の变身」71年9月6日
- 「南ベトナム大統領選 銃剣・流血・駆り出し」71年10月24日
- 「現地特派員座談会 『北京会談とインドシナ』(上) 強腰の裏，変革急ぐサイゴン(下) 解決
いまがチャンス 行方占うラオス攻防」72年2月20日，21日
- 「“ 北京以後の世界 ” 『北』一層ソ連へ傾斜」72年3月2日
- 「『戒厳令下』のサイゴン ネオン消え，長い夜」72年5月24日
- 「チュー政権，和平派弾圧を強化 千五百人，獄門島送り」72年6月28日
- 「停戦特集 ドキュメント・ベトナム戦争 米介入の軌跡 炎と血の四半世紀 19年前に統一
約束 長かった和解の道」73年1月24日

2) パリ特派員時代(1974年9月~78年5月)

1974年

- * 日本赤軍による仏大使館占拠事件(この項に限り掲載の朝・夕刊を明示)
- 「日本赤軍ら3人 オランダの仏大使館を占拠 - 大使ら9人を人質 犯人の要求でパリからスズキを移送 犯人，脱出機と100万ドル要求」9月14日(夕刊)
- 「仕事中に銃声 脱出のオランダ女性語る」9月14日(夕刊)
- (9月13日夕，オランダのハーグで発生した仏大使館占拠事件は，パリ特派員として赴任3日後の事件だった。日本赤軍に関する取材で東京からパリに出張していた社会部・戸田記者と現地に飛び，以後，二人で取材，原稿送稿にあたる)
- 「人質籠城2日目にゲリラとの交渉緊迫 脱出条件折り合わず」9月15日(朝刊)
- 「焦燥の一昼夜 物陰に狙撃部隊 付近のアパートの住民立ちのき」9月15日(朝刊)
- 「人質救いぜん難航 仏大使の連行は認めぬ」9月16日(朝刊)
- 「重苦しく三日目の夜 人質の疲労が心配」9月16日(朝刊)
- 「人質救出，新局面に 脱出機と乗員待機 女性二人を解放 食事など差し入れ 九人の無事確認」9月17日(朝刊)
- 「疲労耐えしっかり 60時間の恐怖 女性二人 ゲリラは紳士的だった」9月17日(朝刊)
- 「ゲリラとの交渉ヤマ場 オランダ首相 『24時間以内に重大決定』」9月17日(夕刊)
- 「不安の四昼夜 新たな要求案だけ」9月17日(夕刊)
- 「ゲリラ空港に移動へ 人質九人も共に スキポール空港閉鎖 軍，装甲車で警戒」9月18日(朝刊)
- 「ゲリラはどこへ? 息詰まるハーグ 空港までびっしり銃口」9月18日(朝刊)
- (この時点でプラハ特派員木村晃三が応援取材に駆けつける)
- 「フランス大使ら人質全員解放 ゲリラ，オランダから飛び立つ スズキ・乗員三人と」9月

18日（夕刊）

「流血は避けられた 身代わり機長ら暗夜の離陸 ひと目でスズキ確認 三人のゲリラ，人質に銃口 機内へ」9月18日（夕刊）

「ため息 日本大使館 反感の重荷が残された」9月18日（夕刊）

* 「ローマ・世界食糧会議 米ソに責任 中国代表激しく非難」11月8日

「飢餓撲滅へ世界の協調を一食糧会議が12項目の宣言案 責任は先進国に 均衡とれた配分が急務」11月16日

「宣言案の全文入手（英語による12項目の要旨訳出）備蓄・情報システムの参加呼びかけ」11月16日

「資源なき先進国の苦悩 仏・伊の泥沼スト」11月17日

* 「危機のイタリア」連載 （上）「不服従運動」燃える バスや電気代，旧料金で払う

（下）貧困で共産党の進出許せぬ ムッソリーニに郷愁 12月3日，4日

「宝塚 パリの真剣勝負 “ベル・ばら” やりません スター鳳蘭に日本から“親衛隊”200人 初日ほぼ満員 日本調より洋風に人気」12月5日

1975年

「停止中の旅客機にバズーカ砲撃 パリ空港にアラブ・ゲリラ」1月14日

「アラブ・ゲリラまたパリ空港襲う イスラエル機に発砲 人質10人」1月20日

「人質10人全員解放 パレスチナ・ゲリラ 国外脱出」1月21日

* 「ゲリラ テルアビブ急襲 キッシンジャー国務長官の中東歴訪に標的」3月6日

「パニック・夜のテルアビブ 先争い逃げる市民 現地ルポ」3月6日

「キッシンジャー長官の中東調停失敗 声明発表し急遽帰国」3月24日

「ルポ・シナイ半島・和平の争点 ミトラ峠を見る スエズ一望の要衝」3月24日

「鄧中国副首相 きょう訪仏 米ソ対欧外交にくさび」5月12日

「欧州の役割で意見交換 鄧小平副首相と仏大統領 米ソ関係 微妙な差調整」5月14日

「フランスの厳しい物価政策 衣類など10品目凍結」6月4日

* 日本赤軍 クアラルンプールでの米，スウェーデン大使館占拠事件

（リビアのトリポリに飛び，空港に降り立つ日本赤軍の様子を取材）

「ゲリラ リビアで投降 日航機到着 95時間ぶり一応決着」6月8日

「真夏の深夜 ゲリラが降りてくる “写真撮るな” 叫ぶ警備陣 現地ルポ」6月8日

* フランコ統領の死

- 「フランコ統領重体？政権譲位説も」10月22日
- 「ルポ・統領の様態気遣い スペイン憂愁」10月25日
- 「“フランコ後”へ動き急 改革派・共同宣言へ？水面下で政権移譲工作」10月26日
- 「フランコ以後 地元三記者に聞くー新スペイン像は？専制政治からの脱却」10月30日
- 「カルロス王子 暫定元首に スペイン王政復古へ一歩」10月31日
- 「“戦う”フランコ統領 生死の境 1 か月」11月16日
- 「フランコ統領死去 多難のスペイン・カルロス王政」11月20日
- 「昏迷深めるイベリア半島 ポルトガル政府機能停止, スペイン亡命政府声明」11月21日
- 「“今新しい時代が” 泣き伏す閣僚たち 死を見取った娘ら 5人」11月21日
- 「カルロス一世即位 自由・穏健な社会建設 初演説で強調」11月23日
- 「“左右共存”を模索 インタビュー・首相有力候補モトリコ伯語る」11月23日
- 「フランコ統領の遺体 『戦没者の谷』に埋葬」11月24日

* 「第1回先進国首脳会議（サミット）」

- 「パリ郊外ランブイエで開幕」11月16日
- 「経済再建へランブイエ宣言」11月18日

（この会議取材に東京から土井共成（経済部）、泉巖夫（経済部）、白石省三、笈川祥一（政治部）、小林正文（ボン）、大畠俊夫、大空 博（パリ）、川岸近衛（ロンドン）高浜賛（ワシントン）が集結、私はマドリードから急遽パリに戻りまた統領の様態変化で二つの都市を行き来する日が続いた）

1976年

- 「スペイン民主化へ改革案 アリアス首相が発表」1月29日
- 「フランスで少年のギロチン刑へ特赦令」2月12日
- 「仏共産党 プロレタリア独裁放棄を決定」2月9日
- 「西欧共産党の新しい波 イベリア半島 “ソ連式”の変形が課題」3月15日
- 「フランスでも初めての女性将軍」4月21日
- 「カーネーション革命の総決算なるか 4月25日・ポルトガル総選挙」4月17日
- 「新時代開くポルトガル総選挙・議会主導政治へ試金石」4月26日
- 「社会主義路線修正へ 社会党交代のポルトガル 早くも連立工作」4月27日
- 「インサイドレポート・ポルトガル革命から2年 振り子どこまで右へ？」5月8日
- * イタリア総選挙
- 「歴史的和解の実験 イタリア式総選挙を見る」ルポ・連載7回（6月9日 6月17日）

ローマで「話題の映画」 - 転換叫ぶ知識人 キリスト教民主党告発大ヒット
ナポリで「ナポリ市政」 - 保守の積弊に挑む 庶民と一体・共産市長
ボローニャで「極右・極左」テロに走らず焦り 共産党の体制化に不信
ローマで「見守る国民」幻想持たぬ現実派 駄目ならまたやり直し

（ 回はジュネーブ川口忠彦特派員執筆 ）

「イタリア総選挙 キリスト教民主党辛勝 左右の分極化進む」6月22日
「連載（上）どこへ行くイタリア 共産党との連携 どう実現化」6月23日

「スペイン 前途多難な新内閣 新首相にスアレス氏」7月9日
「左翼連合政権 フランスでも難産 綱領再調整で激論 “核” の是非が口火」8月12日
「殺人鬼にパリ “凍る” 妻含め分かっただけで6人 35年間でもっと増えそう」8月13日
「第三の道求める欧州」特派員座談会 9月17日

（ジュネーブで開かれた特派員座談会には、東京から為郷編集局長、安田外報部長、大脳（モスクワ）、北村（ロンドン）、川口（ジュネーブ）、大空（パリ）、武田（ボン）永井（ローマ）、尾崎（ブラハ）各特派員が出席した。

「フランス 身代金なんと210億円 誘拐 男女を惨殺」10月2日
「モスクワ行き特急列車を襲撃 武装賊十数人が反ソ・ピラ」10月5日
「ピカソ奇跡の生還 盗難の118点 マルセーユで犯人一網打尽」10月8日
「ジスカール大統領の著作『フランスの民主主義』をめぐる論争」10月12日
「スペイン・仏との協調進展『EC加盟』賛意得る カルロス国王帰国」10月31日
「スターリンと同じ 華政権の権力闘争 “毛信奉” の仏新左翼に動揺」11月15日
「一世紀ぶり パリ市長選燃ゆ」11月21日
「最大のドル偽造団 女性含む四人 欧州全域に28億円」12月2日

1977年

「フランス与党の対立深刻 パリ市長選に候補乱立 大統領説得を断念」1月30日
「仏の前パチカン大使逆上 妻と子供を射殺」2月3日
「ソ連のユネスコ駐在員 スパイ容疑でフランスから追放」2月22日
「連載 燃える仏政界（上）パリ市長選と左翼連合」3月10日
「仏最大の週刊誌・レクスプレス身売り 左右対立の政治風土反映」3月17日
「インサイドレポート・仏 貿易戦争で巧みな二面作戦 日本を悪役に世論操作 エアバスは猛烈販売」3月18日
「仏地方選 左翼連合が三分の二占める」3月22日

「パリ106年ぶりに自治権 市長にシラク氏就任 中央政治に影響」3月26日

* 史上最悪のジャンボ機衝突

「カナリア諸島 ジャンボ機同士が衝突炎上 死者530人?濃霧,相次ぎ離陸中に」3月28日

「ルボ・まるで地獄 爆発 外へ投げ出される」3月28日

「ルボ・悲惨,滑走路の残骸 徹夜で遺体収容 死者は575人 日本女性2人も確認」3月29日

「空港に漂う死臭 残骸の中 骨や肉片」3月30日

「カメラ・ドキュメント 戦慄の墓標 ジャンボ機事故を現地に見た」4月4日

「スペイン共産党合法化 脱フランコ 内戦終結から38年」4月11日

「ベルギー総選挙 与党勝つ キリスト教社会党中心の連立確保」4月18日

* 第3回先進国首脳会議(ロンドン・サミット)

「核」問題対立のまま閉会(5月10日) 貧国への援助増,国際収支で日本に転換迫った
この会議を東京・欧州特派員団の一員として取材・報道にあたった。

サミットを終えて 欧州トライアングル 連載 "フランスの威信低下 内政昏迷いまや火薬
庫に」5月16日

「スペイン ストで緊迫『真の民主化』叫ぶ バスク過激派 総選挙へ実力行使」5月18日

「仏ゼネスト 最大規模 500万人が参加」5月25日

「ブレジネフ・ソ連共産党書記長が訪仏 緊張緩和と核拡散防止へ」6月21日

「仏ソ首脳会談終わる『人権と自由を尊重』仏は対米外交の拠点」6月22日

「スペイン総選挙 スアレス政権が勝利 中道路線を強固に」6月23日

「ソ連のユーロ Kommunismus 批判 南欧共産党一斉に反発」6月25日

「連載・西欧レポート 不安の時代の若者・新哲学派 マルクスも毛沢東もダメ 仏シラク世
代の心つかむ」8月26日

「3面トピックス・マリア・カラス波乱の生涯 歌に生き恋に生き オナシスとロマンス 太く
短く 燃え尽きた五十三年 太目,私生活 プレスリーの死と奇妙に似て」9月17日

(3月17日朝刊掲載の「世紀のプリマ急死」を受け,同日夕刊に川島太郎と共同執筆)

1978年

* フランス総選挙

「仏総選挙 あと一か月 左右四つ巴の戦い」2月13日

「連載・上 低成長下,迫られる選択」2月5日

「フランス総選挙ルボ 連載6回 揺れる三色旗」2月22日 2月28日

港町の不況風 道化ですまぬ危機感 ダンケルクで 緑の活動家 公害でノンボ
リ食うーグルノーブルで 異例の意見広告 左翼勝利に危機意識 ストラスブルで

（ は川島太郎特派員が執筆）

- 「両陣営の思惑探る 与党連合 保守本流を競う “関が原”」3月4日
- 「仏選挙・きょう投票 ベテラン仏記者ズバリ予測 “国民は変化を求める”」3月12日
- 「仏総選挙第一回投票 左翼50%，予想を下回る」3月13日
- 「決戦投票で与党連合が圧勝 左翼聯合に87議席差 共産入閣に国民は拒否反応」3月20日

「スペイン共産党 初の公認大会 レーニン主義削除を採決」4月20日，23日

「仏共産党に不協和音 今日の断面 マルシェ路線に “ノン”」4月25日

* ヨーロッパ再発見 連載・一部12回 二部9回

（学者，外国人記者，本社デスク，欧州特派員を動員した大型企画で私は以下の原稿2本を執筆した） 柔軟な仏共産党 お針子も戦線に 5月28日

移民労働者 “貧しい白人” 圧迫 5月30日

3）外報部デスク時代（1975年6月～1985年9月）

* 鄧小平氏復活直後の中国取材

「鄧小平 中国副首相との会見」80年3月30日

鄧小平氏の“復活”を機に、「人民日報」より読売取材団派遣の要請があり，渡辺恒雄論説委員長（当時）を団長とする8人の取材チームが結成され，3週間にわたり中国各地を訪れた。私はそのうちの一人。鄧氏と渡辺団長との会見は3月29日実現。私たち団員もその場に同席，会見内容を記事にした。下記の連載 回目を担当。

「連載・80年春 中国『自由化の風』 犯罪も運んだ 闇物資どっと」4月18日

「連載・80年春 中国『百花斉放』 風向き変わる “告発文学” 下火に？」4月20日

「写真グラフ ダイナミズム “舞う” 中国 おおらかさの魅力の中で」5月27日

* 3年半ぶりのフランス（仏外務省の招待で訪仏取材）

「パリは変わっていた インサイドレポート ミッテランへの “恩寵の季節” 過ぎて

しばんだ希望 失業者とデモ」81年10月26日

「素顔のパリ 連載6回」11月6日 11月11日

野放し放送 首都圏で96局 “国家独占” の電波を国民の手に 若者たち 失業増大に絶望観 “狭き門” コネだけが頼り 予言ブーム ノストラダムスの「バラが咲く...」的中がきっかけ 暗い世相も反映 老化現象 若者は次々と郊外へ パリの中心部は高級住宅化 薄れる昔の面影 映画復権 新作にどっと人の波 ミッテラン 政権の解放政策で活力 チップ論争 いまや難問 サービス料込みでも心づけ

「地球レポート・エアバス310への旅」82年11月17日

エアバス社の招きでフランス、ドイツ、イギリスのエアバス共同制作現場を訪れ「欧州の空の伝統」と「米の独占」挑む欧州の実情を伝えた。

「誤訳が作るスター像」85年2月16日

4) ロンドン特派員・欧州総局長時代(1985年10月~88年11月)

1985年

「“好戦的な米”に再び警戒感 レーガン大統領のイタリア客船乗っ取り犯奪取作戦 西欧は懐疑的」10月17日

「ソ連、核破壊力で米抜く 英戦略研年次報告 宇宙兵器の研究も」11月2日

*初のレーガン・ゴルバチョフ会談(ジュネーブで11月19日 20日開催)

「米ソ・サミットを占う 連載 欧州の視点 成功も失敗もなし 双方認める対話に意義」

(ソ連崩壊へつながるレーガン・ゴルバチョフによる初の会談がジュネーブで開催、その前触れ、予測記事をパリの国際関係研究所ティエリ・ドモンブリアル所長とのインタビューをもとに書いた)11月14日

「緊張と期待 秒読み首脳会談 早くも“相違”くっきり」11月19日

「幕開けハプニング 初顔合わせ 異例の予定オーバー」11月19日

(この首脳会談取材のためワシントン、モスクワ、ロンドン、パリ、ジュネーブ特派員が集結、会議コミュニケや首脳記者会見などは読売特派員団として記事になっている)

「再スタート米ソ会談 連載(下) 欧州諸国に変化の兆し 希望残す“新雪だけ”」11月26日

「地球'85 連載 ソ連書記長 計算巧み6月訪米控え対西側戦略」12月26日

「“空洞化”進むユネスコ 英国の脱退深刻な影響」12月26日

1986年

「ダウンタウン物語(カムデン・タウン) 運河沿い活気の下町」1月4日

「英、国防相が突然辞任 閣内対立、表面に サッチャー政権にしこり」1月10日

「国際関係の人間学 連載(10) 国防相の戦い 欧州兵器産業守れ」1月11日

「国際関係の人間学 連載(23) 英国式付き合い術 ソ連に食い込む産業人」1月28日

「パルメ・スウェーデン首相暗殺 路上で至近銃撃 犯人複数、外国人か」3月1日

「日本を学ぼう 英紙が大型の特集連載」3月3日

「『西側の一員』決意示す スペインのNATO残留決定」3月15日

「仏の左右共存 西欧“変化の芽”注視 失敗なら英独へ混乱波及も」3月17日

「スターリン孫娘に渡英ピザ」4月5日

*「米のリビア空爆 欧州対米批判が続出 報復テロを危惧」4月16日

「リビア攻撃 米ソに亀裂 米英ソ・カイロ特派員 電話・テレックス座談会」4月16日

- 「米・リビア対決 連載（下）リビアの報復恐れる西欧 米出撃許した英孤立」4月17日
- 「瀬古，独走のV ロンドン・マラソン 稼いだり！賞金875万円」4月21日
- 「エリザベス女王 満60歳に」4月22日
- 「東京サミット 協調への3日間 連載 国際テロが最大の課題」4月22日
- 「英，リビア活動家を国外追放 テロ防止へ21人」4月23日
- 「ロンドンで考える 英仏の『遠い国，近い国』 詩人の死めぐり報道ギャップ」4月23日
- * 「仏大統領，本社編集局長と単体会見 『巨額黒字，社会構造に根ざす』4月28日
（パリで実現したミッテラン仏大統領と編集局長の会見内容（フランス語）翻訳のためロンドンから応援）
- 「原発チェルノブイリ事故 周辺国は厳戒体制 発表遅れソ連非難」4月30日
- 「ソ連の秘密主義に不満噴出 米英ソ・特派員座談会」4月30日
- 「『円高，さらに進む余地』ハウ英外相と単体会見 テロ対策で国際協力を」5月1日
- 「（英皇太子夫妻の訪日を前に）特集 率直な若き王族 華麗に 大胆に 気品高く 国民の敬愛に支えられて 四等国の君主にはなりたくない」5月1日
- 「ウイークエンド・GLOBAL（特集コラム）ミュージカル映画『ピギナーズ』ロンドンでヒット 英国病なんか吹き飛ばせ!! プロデューサーと語る」5月10日
- 「世界が注目 日本の同日選挙 それにしても不可解，日本の政治 外国の見方」6月26日
- 「離婚合法化に反対60% アイルランド国民投票」6月27日
- 「ボクの結婚はもう少し先 浩宮さま“個人差”強調 ロンドンで会見」7月24日
- 「対南ア制裁で孤立深める英政権 英連邦各国に失望感」8月12日
- 「アウシュビッツから奇跡の生還 ノーベル平和賞ウィーゼル氏 米・人権作家」10月14日
- 「英，シリアと断交 爆破テロに報復 リビア機も乗り入れ禁止」10月25日
- 「英また性スキャンダル『カインとアベル』原作者アーチャー保守党副幹事長」10月27日
連載 北アイルランド 二つの顔 10月29日 11月5日
- 「明るい顔」宗教テロは別世界 平穏強調する一般市民 「家庭の味」人情香る民宿
一家 イメージ好転へ使命感 「歌の町」郷土に根づく文化活動 広がる相互理解の輪
「観光資源」壮麗...砂丘のゴルフ場 治安とホテル不足に悩み 「企業誘致」豊富な
人材 “穴場”とPR 後発・日本に熱い目 「国境の町」厳しい検問・警備体制 テ
ロ多発，根深い紛争
- 「戦略核は米ソほぼ均衡 国際戦略研軍事力報告 ソ連もSDI研究」11月6日
- 1987年
- * 「ポーランド・ヤルゼルスキ国家評議会議長と単体会見
- 「日本の経済力に期待」1月12日

中曽根首相のオランダ訪問を前に、83年7月の戒厳令解除後、初めて日本の新聞社との単独会見が実現した。水島敏夫ワルシャワ駐在特派員と会見に臨み共同執筆した「連載・90年代への助走 世界はいま サッチャー世代 不安と無関心の10代 エイズと核戦争に 失業・離婚社会映し」2月5日

*モロッコ取材

「多彩な顔モロッコ 地中海の要衝 近代化に仏文化の影響色濃く」3月17日

モハメッド皇太子の訪日を前にモロッコ政府の招きで現地に1週間滞在、この記事を書く。

「司馬遼太郎氏 イギリスで講演『文学から見た日本史』独特の語りには爆笑も」3月27日

「ゴルバチョフ改革と東欧 自由化に限界 行き過ぎ警戒 ブダペストで」5月15日

「ベネチアサミット 欧米の思惑 INF・貿易・通貨・農業 亀裂の火種ずらり」

「英選挙戦スタート・自信満々『サッチャー路線』 新保守主義の定着狙う」5月13日

*第13回先進国首脳会議(ベネチア・サミット)

「サミット閉幕 重くなる日本の責任 東西新関係へ柔軟対応を」6月11日

(東京から政治部、経済部記者、それに欧米各地の特派員がベネチアに集結、現地統合デスクとしてサミット報道にあたった)

「“プラハの春”まだ遠く 変化の兆しあるが 体制の動きは遅い」7月7日

「連載・シネマ再訪 名画の舞台は今『嵐が丘』 列なすブロンテ詣で」8月26日

「始動する新デタント 西欧期待と警戒 本音は“INF以後”を警戒」9月21日

「純日本調 マクベス 蜷川幸雄 衝撃のロンドン公演」9月22日

「ルボ・脱農業国めざすアイルランド 日本企業誘致が最大目標 若い労働力PR」11月11日

「ポーランド国民投票 経済改革の是非を問う 反体制派締め付け強化」11月29日

激動し始めた東欧取材の一環としてワルシャワへ。今泉哲雄・現地特派員と共同執筆

「米ソ首脳会談・きょう開幕 国際関係を再構築 ゴ書記長が声明」12月8日

ワシントンへ向かう途中、ゴ書記長はイギリスに立ち寄りサッチャー首相と会談した。

「英ソ首脳会談・ゴルバチョフ書記長の声明全文」12月8日

「連載・ワシントン会談後の世界 国際関係専門家はどう見る M・ハワード英オックスフォード大学教授 査察実施に難関残る 過度の期待 危険を生む」12月15日

「東欧建て直しに突破口 チェコ書記長交代 ゴ書記長も了解 英仏紙が論評」12月20日

「ソ連70年目の革命・連載 ユーロコミュニズム 波及効果は期待薄 変動に対応できず 退潮」(ローマ マドリードで取材) 12月28日

1988年

「西欧・変わる価値観(コラム) INF後の防衛 意識変化進む」1月1日

- 「アットランダム（コラム）シティーの猛烈ビジネスマン 古い伝統破る先兵に」1月27日
- 「北朝鮮制裁 大韓航空機事件 他国の対応は？ 英・強い非難声明を発表」1月27日
- 「続シネマ再訪 アガサ 愛の失踪事件 “人生の深い淵” 垣間見え」2月3日
- 「無差別テロに市民の怒り IRA孤立化進む ベルファストからの報告」3月15日
- 「グローバル特電（コラム）『わがパリ』彩る人間模様 プラハ捨てた女流監督」4月20日
- 「ミッテラン大統領 保革共存の実験 大統領選挙を前に 仏社会学者ミシェル・クロジ
エ教授に聞く 保守派尊重し体制維持 シラク氏と“共演”」4月21日
- * サッチャー英首相 読売新聞編集局長と単体会見
- 「日本の対英投資に期待 一層の市場開放を 竹下首相の訪英歓迎」4月27日
- 「自由貿易の堅持を強調 相互主義で障害除け」4月27日
- * ミッテラン仏大統領再選
- 「保守・シラク氏に大差 『保革共存』新たな段階 新首相指名が焦点に」5月10日
（この原稿は中井康夫パリ支局長との共同執筆）
- 「再挑戦するフランス 欧州統合、夢と野心 自国強化へ主導権もねらう」5月12日
- * レーガン・ゴルバチョフ米ソ首脳会談（モスクワ）
- 「『戦略核』進展に自信 ソ連国際部第一副部長が断言 任期制限・党書記長にも適
リガチョフ氏の地位に変動ない」5月29日
（上記ザグラジン第一副部長との会見記事は小島敦モスクワ支局長との共同執筆）
- 「両首脳が 赤の広場 を散歩 市民の前で舌戦も」6月1日
- 「米ソ首脳会談のまとめ 対話継続の確立に意義 相互依存の東西関係へ」6月2日
- 「コラム・世界最古の英・外国人記者クラブ 特派員650人を支える生き字引」7月19日
- 「お祭り探検・ヨークの聖史劇 『十字架』嘆きの大合唱 夕闇の野外ステージ 市民300人が
熱演 キリスト役はインドの俳優ビクター・バジナー」8月1日
- * 『フランスの新しい風』8月 中央公論社から刊行
中央公論の企画。編者の辻邦生とかつてのパリ特派員友田錫（産経）、和田俊（朝日）、柏
倉康夫（NHK）とともに2週間、ロワール、ブルターニュ、南仏を旅した。私はロンド
ンから参加した。
- * ロンドンで中近東大使会議
- 「復興援助、日本に期待 藤本芳男駐イラン大使と会見」8月9日
- 「復興援助に慎重配慮を 中村泰三駐イラク大使と会見」8月11日
- 「『日英関係好転』の内側 企業進出に“傲慢”批判 残る戦争のしこり 日本へ賠償要求も」
11月1日

5) 編集員時代 (1988年12月~1991年9月)

1989年

* 20世紀文学紀行・連載 (前述・共著欄参照)

「リマ バルガス・リョサ 『都会と犬ども』」3月27日

「サンチャゴ パブロ・ネルーダ『大いなる歌』」4月15日

「ブエノスアイレス ホルヘ・ルイス・ボルヘス 『プロディーの報告書』」4月24日

「“ハーンの世界”旅で実感 八雲と日本 ローナン駐日アイルランド大使語る」6月10日

* 小泉八雲の百年・連載 8月18日 8月24日

心のふるさと松江 “国際化の芽” 置き土産に ダブリンでの誓い 中学生の交歓
暖かく 生地レフカダ島 縁結ぶ入り江の光景 アメリカの旧居 住まぬ地にハー
ン通り 優しいまなざし 心の底から愛した日本

「英の陶芸家ジルさん 日本で14回目の個展 小鳥や動物, 息づく自然」9月4日

「世界の指導者たち サッチャー」月刊公論10月号 (前述・雑誌への寄稿欄参照)

「インタビュー・来日中のペルー作家 バルガス＝リョサ氏 政治への現実が私を変えた
大統領選挙の経験も文学に」10月23日

1990年

「フランスでも“日本たたき” 感情的な異質論 双方で関係見直しを」2月16日

* ベルリンの壁崩壊後の東欧取材

「世界は変わる・連載 脱・計画経済のポーランド 台頭するニュー・リッチ」4月16日

「復活した宗教 プラハの聖ガブリエル教会で」4月23日

「写真グラフ ワールド・フォーカス プラハ市民に『自由』の春風」4月24日

「売れる西側式の自由な発想 プラハに新型・日刊紙 旧体制の悪業批判」5月16日

「東欧革命 模索の第二段階 経済格差いぜん深刻 人事刷新なお残る旧体制の影」5月18日

「国際文化 “血の日曜日” 詩に刻む 北アイルランド出身のシェイマス・ヒーニー氏 京大
講演で自作を朗読, 解説」7月30日

「国際文化 ジャパン・フェスティバル 空前の規模で16日開幕 全英に上陸 “素顔の日本文
化”」9月10日

「18年ぶりのサイゴン 今と昔 愛惜の中に交錯」10月15日

* 巨大遺跡に行く・連載 (前述・共著欄参照)

「ペトラ バラ色に染まる宝物庫 民族の記念碑」(上)(下) 3月5, 6日

「マサダ ユダヤ魂を鼓舞する生地 戦場跡から死海文書」(上)(下) 4月16, 17日

「ベトナム・ミソン チャムの聖地 遠い記憶 飛天の舞い」10月30日

「ベトナム・ニャチャン 豊穡の海に女神の幻影」10月31日

* 「現代史再訪」(前述・共編著欄参照)

予言者ドゴール (上) 「大統領を暗殺せよ ついにテロ指令は下った 頭を掠めた銃弾
アルジェリア自決に反発 極右は牙をむいた」 2月19日

予言者ドゴール (下) 「私は生まれてからずっと、フランスについて... 祖国に栄光あ
れ 祖国よ高貴であれ 使命感に貫かれたその生涯」 2月20日

ポーランド・戒厳令前夜 (上) 「グダニスクの暑い夏から、舞台は暗い冬へ ワレサ
『連帯』の勝利 だが、ソ連軍は介入へと戦車を進めた」 7月23日

ポーランド・戒厳令前夜 (下) 「よし、行かないよーブレジネフは約束したが... 『連帯』
と政府対立 高まる内戦の危機に ヤルゼルスキが切り札」 7月24日

6) 解説部長時代 (1991年10月～93年3月) のコラム (2週間に一本、解説面に掲載)

「ことばの落とし穴 予期せぬ摩擦も」(91・10・20), 「水には流せない 戦争という過
去」(91・11・9), 「“死の谷” 渡って 帰って来た男」(91・12・1), 「米大尉の恋と
トンキン湾の星」(91・12・23), 「エリツインで なかった “年男”」(92・1・19), 「神
が恵んでくれた写真」(92・2・2), 「若い才能きらめく 夢のイメージ空間」(92・2・
23), 「人ごとでない 重症の日本病」(92・3・15), 「英国人に学ぶ “引退の美学”」
(92・3・29), 「弁当持参のススメ 作る人には感謝を」(92・4・12, この項・羽島昇兵
編集委員), 「奇跡は一度しか 起きないものか」(92・4・26), 「人質救出で見せた ペ
ロー氏の決断力」(92・5・17), 「外国人女性写真家 現場に二人いた?」(92・6・7),
「どこに潜むカルロス 欠席裁判で『終身刑』」(92・6・28), 「スリラーの題材に 日本
がなる時代」(92・7・19), 「悲しみと怒り招いた “黒い雨” と “赤い雨”」(92・8・
9), 「理念の激突が支える 米大統領選のドラマ」(92・8・30), 「釣り師は、だれもが
心に傷を持っている」(92・9・20), 「地図を読んで 決断する勇気」(92・10・11), 「ち
ぐはぐな 太平ニッポン」(92・11・1), 「ドイツの難民問題 予見した作家の感性」
(92・11・22)

7) 月刊誌「This is 読売」編集長時代 (1993年4月～95年3月) の主な特集・企画

「迫り来る政治の総決算」「雅子さんに送る皇室学」(93・6月号), 「特集・日米破局を防
げるか」「『NO』というための条件」(93・7), 「東京裁判 極限の人間ドラマ」「特集・
自民党の幕末 再編の黒船」(93・8), 「虚像の軍神 東郷平八郎」「政治特集・カオスの
震源 7・18」(93・9), 「特集・転換期 日本の明日を読む 時流が生んだねじれ政治」
(93・10), 「緊急提言 平成大不況への処方箋」「特集 極限まできた金日成体制」(93・
11), 「2・26事件 軍中枢を巻き込んだ権力犯罪 未公開 川島陸相の証言全文」「ケネ

ディ暗殺30年 新証言 オズワルドとCIA」(93・12),「岡崎久彦が読む21世紀 悔恨の世紀から希望の世紀へ」「わが青春の原節子」(94・1),「ビッグ対談 江崎玲於奈VS平山郁夫 さらば、我らが模倣の世紀よ」「特集・北朝鮮 亡命中尉が新証言」(94・2),「細川政治 黙って見ておれない 渡辺美智雄/江藤淳 異色対談」「特集・コメ官僚への葬送曲」(94・3),「雇用問題特集 悪夢の再来『大学は出たけれど...』 女子大生たちよ! 私の就職論 森山弓子」(94・4),「拝啓 大統領閣下 日米破局曲招く場当たり対応」「北朝鮮特集第3弾 金日成 最後の闘争」(94・5),「緊急政治特集 リーダー不在時代の不幸」「今こそ金融システム改革のとき」(94・6),「シミュレーション 朝鮮半島爆発 北の核部隊 ソウルを占拠」「総理大臣が辞めるとき」(94・7)「闇に葬られた皇室の軍部批判」「ライシャワー/上坂冬子 日米の50年」(94・8),「元GHQ高官が明かす憲法第9条の秘密」「二つの顔の怪人・金正日」(94・9),「村山政権は政党政治を破壊する」「特集 中国経済革命」(94・10),「敗戦日本の治安情報 玉音放送は敵の謀略だ」「処刑から50年 ソルゲの実像」(94・11),「憲法を考えるとときが来た 読売改正試案の全文と解説・完全収録」(94・12),「特集 '95日本 政局と景気」「サッチャー来日記念講演」(95・1),「特集 崩壊する大学 受難の学生・企業」「ドーム決戦・わが戦略 長嶋茂雄対談 王貞治」(95・2),「大都市地震 人災の構図 暴露された危機管理の欠如」「戦後知識人のあいまいさ」(95・3)